

自意識と統制の所在が羞恥傾向に与える影響

Effects of Self-consciousness and Locus of control on Embarrass ability

社 98 - 572 小坂 裕美

キーワード：公的自意識、私的自意識、統制の所在、羞恥傾向

Key words：public self-consciousness , private self-consciousness , Locus of Control, Embarrass ability

問題

羞恥は日常においてよく経験される身近な感情であるが、個人的、主観的なものであり、個人差が存在する。そして、この個人差を生じさせる要因として、自意識と統制の所在が考えられる。まず、自意識とは、客観的に自己を注視する過程であり (Mead,1934)、Fenigstein ら (1975) は、この自分自身に対して注意を向けやすい性格特性を自己意識特性と呼んだ。さらに、自分の外見や振る舞いなど、社会的自己を意識しやすい特性を公的自意識、自分の内的な思考、感情を意識しやすい特性を私的自意識とした。これらの特性から、公的自意識の高い人は低い人に比べ社会的な場面で、そして私的自意識の高い人は低い人に比べ、他者の存在しない場面で羞恥感情を感じやすいと思われる。

また、統制の所在は、自分の成功や失敗、賞罰というような結果を左右しているものがどこにあるか感じている信念のことであり、努力や能力など、自分の力によって結果をコントロールできるという信念は内的統制 (Internal Control)、運などの外部の要因によってコントロールされているという信念は外的統制 (External Control) である (Rotter,1966)。このように、内的統制志向の人は物事の結果を自分の努力、能力によって起こったものだと感じやすい、と考えられることから、内的統制志向が強い (結果を自分に帰属しやすい) 人ほど、失敗した場面において羞恥を生じやすいと考えた。ここまで述べてきた仮説を、以下にまとめた。

仮説

公的自意識の高い人は、低い人に比べて、他者が存在する状況において羞恥を生じやすいであろう。

私的自意識の高い人は、低い人に比べて、自分が失敗した状況において羞恥を生じやすいであろう。

内的統制志向の人ほど、自分が失敗した状況において羞恥を生じやすいであろう。

方法

1. 調査対象者及び手続き

- ・ 2001 年 10 月 12 日社会学部 201 教室での実験心理学受講者 144 名に授業後
 - ・ 2001 年 10 月 18 日社会学部 420 教室での心理学基礎研究受講者 32 名に授業前
- 「大学生の意識調査」と題した質問紙を配布し、一斉に回答してもらい、その場で回収した。

・10月12日から10月30日にかけて、関西大学学生26名（応援団吹奏楽部14名、自然愛好会サークル9名、その他3名）、他大学学生3名に個別に調査票を配布、後日回収した。

調査対象者は計206名（男性88名、女性118名、平均年齢20歳）であった。

2. 調査票の構成

- ・フェイス項目（性別、学年、年齢、しつけの厳しさ、友人数）
- ・Locus of Control 尺度（鎌原、樋口、清水1982）18項目、4件法で質問
得点が高いほど内的統制志向、低いほど外的統制志向となる。
- ・自意識尺度日本語版（菅原、1984）21項目、5件法で質問
- ・状況別羞恥感情質問紙 それぞれの状況でどの程度羞恥を感じるか4件法で質問した。
これは、（成田、寺崎、新浜、1990）から抜粋した項目に、私的自意識が影響を及ぼすと考えられる、独自に作成した項目を加えたものである。
作成上のミスにより、「自分のしたことを後悔する時」という質問になるはずの項目が、他の項目と同一の質問となってしまったため、分析するにあたって削除した。
そのため、分析に用いたのは計20項目である。

結果

1. 尺度の検討

尺度の検討と羞恥感情の状況的分類を行うため、羞恥傾向尺度の結果に対し因子分析（主因子法、プロマックス回転）を行ったところ、5つの因子が抽出された。それぞれ「人前での外見・行動因子」（ $\lambda = .73$ ）、「大勢の人前因子」（ $\lambda = .77$ ）、「照れ因子」（ $\lambda = .60$ ）、「失敗因子」（ $\lambda = .61$ ）、「自己管理不足因子」（ $\lambda = .66$ ）と名付けた。

また、自意識尺度についての因子分析では、公的自意識因子（ $\lambda = .88$ ）と私的自意識因子（ $\lambda = .84$ ）が抽出され、信頼性が十分に高いことから、以降、それぞれ公的自意識尺度、私的自意識尺度として分析に用いた。

2. 仮説の検証

	公的自意識グループ	N	平均値	標準偏差
人前での外見・行動因子	高群	61	17.541	1.803
	低群	61	14.902	2.902
大勢の人前因子	高群	61	9.885	1.518
	低群	61	8.393	2.124
照れ因子	高群	61	8.82	2.029
	低群	61	7.672	2.135
失敗因子	高群	61	9.328	1.72
	低群	61	8.623	2.043
自己管理不足因子	高群	61	6.279	1.827
	低群	61	5.525	2.054
羞恥全体	高群	61	60.459	6.233
	低群	61	53.049	7.786

公的自意識と羞恥傾向について、公的自意識高群（上位 30%）と低群（下位 30%）間の羞恥傾向尺度全体および各因子の平均値の差を調べるため、t 検定を行った。

上の表 1 は、各因子、羞恥傾向全体における公的自意識高群、低群別の人数、平均値、標準偏差を示したものである。分析の結果、「人前での外見・行動因子」、「大勢の人前因子」において 0.1%水準($t=6.033, df=100.323, p<.001$)、($t=4.464, df=108.611, p<.001$)、「照れ因子」で 5%水準で有意差($t=3.043, df=120, p<.01$)、「失敗因子」と「自己管理不足因子」では 5%水準で有意差がみられた($t=2.062, df=116.615, p<.05$)、($t=2.142, df=, 120, p<.05$)。また、羞恥傾向全体では 0.1%水準で有意差がみられた。($t=5.803, df=120, p<.001$)。これらの結果から、他者が存在する場面である「人前での外見・行動因子」、「大勢の人前因子」、「照れ因子」において大きな有意差がみられたため、仮説 1 は支持された。

仮説 2 に関する私的自意識と羞恥傾向について、私的自意識因子得点高群（上位 30%）と低群（下位 30%）間について t 検定を行った。下の表 2 に、各因子および羞恥傾向全体における私的自意識高群、低群ごとの人数、平均値、標準偏差を表した。

	私的自意識 グループ	N	平均値	標準偏差
人前での外見・ 行動因子	高群	61	16.295	2.66
	低群	61	16.344	2.828
大勢の人前因子	高群	61	8.557	2.164
	低群	61	9.279	2.192
照れ因子	高群	61	8.197	2.197
	低群	61	8.197	1.878
失敗因子	高群	61	9.541	2.013
	低群	61	8.803	1.896
自己管理不足因 子	高群	61	6.197	2.12
	低群	61	5.689	2.11
羞恥合計	高群	61	57.18	8.326
	低群	61	56.361	8.499

自分が失敗した状況である「失敗因子」では 5%水準で有意差がみられたが ($t=2.084, df=120, p<.05$) 周囲の人の目はないが、同じく自分が失敗を引き起こした状況である「自己管理不足因子」では有意でなかった ($t=1.327, df=120, p>.10$)。また、「人前での外見・行動因子」、「照れ因子」でも有意差はみられなかったが ($t=-0.099, df=120, p>.10$) ($t=0.000, df=120, p>.10$) 「大勢の人前因子」では私的自意識の高い人のほうが低い人よりも羞恥を感じにくい、という傾向が見られた ($t=-1.829, df=120, p<.10$)。羞恥傾向得点全体での有意差はなかった ($t=0.509, df=120, p>.10$)。以上の結果から、仮説 2 は完全に支持されたとはいえない。

仮説 3 に関する統制志向と羞恥傾向について、Locus of Control 尺度得点高群（内的統制群）と低群（外的統制群）の間で、t 検定を行った。

次の表 3 は、各因子および羞恥傾向全体における内的統制群、外的統制群別の人数、平均値、標準偏差を示したものである。

	統制位置グループ	N	平均値	標準偏差
人前での外見・行動因子	高群 (内的統制)	61	15.984	2.705
	低群 (外的統制)	61	16.377	3.006
大勢の人前因子	高群 (内的統制)	61	8.885	2.169
	低群 (外的統制)	61	9.246	2.481
照れ因子	高群 (内的統制)	61	8.049	2.093
	低群 (外的統制)	61	8.197	1.948
失敗因子	高群 (内的統制)	61	9.148	2.112
	低群 (外的統制)	61	9.066	1.94
自己管理不足因子	高群 (内的統制)	61	5.557	1.928
	低群 (外的統制)	61	5.967	2.041
羞恥合計	高群 (内的統制)	61	55.721	8.102
	低群 (外的統制)	61	56.836	8.764

失敗の状況にあたる「失敗因子」「自己管理不足因子」ともに有意差はみられなかった ($t=0.223, df=120, p>.10$) ($t=-1.140, df=120, p>.10$)。また、その他の「人前での外見・行動因子」、「大勢の人前因子」、「照れ因子」でも有意差はあられなかった ($t=-0.760, df=120, p>.10$) ($t=-0.855, df=120, p>.10$) ($t=-0.403, df=120, p>.10$)。よって、仮説 3 は支持されなかった。

考察

公的自意識に関しては、「人前での外見・行動因子」、「初対面・大勢の人前因子」、「照れ因子」において大きな有意差がみられ、仮説 1 のとおり、他者から見られる状況では、公的自意識が高い人ほど羞恥感情が起こりやすいことがわかった。また、「失敗因子」、「自己管理不足因子」においても有意差がみられたことから、公的自意識の高い人は直接他者の目にさらされる場面でなくとも、客観的に自分を見つめる習慣があると考えられる。

私的自意識については、「失敗因子」において有意差がみられたが、「自己管理不足因子」では差がみられなかった。この理由として、「自己管理不足因子」は「ダイエットに失敗した時」のように具体的な事象について質問したため、個人によって重要度に差が出てしまったことが考えられる。また、「大勢の前で自己紹介する時」のような「大勢の人前因子」では私的自意識の低い人のほうが羞恥を感じにくいという結果であった。これは、私的自意識の高い人は他者に示すべき自己像が明確なので、大勢の前で自己呈示が求められる状況でも、不安を感じにくく、よって羞恥の度合いも低くなると考えられる。

仮説 3 に関する統制の所在については、どの因子も有意差はみられなかった。このことは、Locus of Control 尺度の大部分の項目が成功事例について質問したものである一方、羞恥傾向尺度は失敗事例を扱ったものであるということが理由として考えられる。なぜなら、成功は内的に帰属しがちでも、失敗は外的に帰属する傾向を持つ人も多いからである。よって、統制に関しては失敗の事例を挙げた尺度を用いる必要があるだろう。

参考・引用文献

- ・菅原健介 1998 セレクション社会心理学 19 人はなぜ恥ずかしがるのか - 羞恥と自己イメージの社会心理学 - サイエンス社
- ・ 蘭千壽・外山みどり（編）1991 帰属過程の心理学 ナカニシヤ出版

[転載・引用をご希望の場合は必ず事前下記までご連絡ください。]

著作責任者： 土田昭司 [関西大学]

連絡先： tsuchida@kansai-u.ac.jp

最終更新日： 2002 年 4 月 20 日